



英国総選挙2010: 第一回党首テレビ討論

英国初の試みである主要3党党首によるテレビ討論が15日夜のプライム・タイムに行われた。全体としては、事前の期待を上回る内容の討論番組となった。今まで第3党党首として一般の認知度が低かった分、自民党のニック・クレグが好パフォーマンスで株を上げた。労働党のゴードン・ブラウン、保守党のデイビッド・キャメロンも無難にこなした。

今夜は3回シリーズ第一回目。民放ITVが-host局で、時間はプライタイムの夜8時半から10時の1時間半(CMなし)。各党合意の番組フォーマットは、発言時間から質疑の形式など微細に至るまで事前に取り決め。自由な討論になる余地がなくつまらない番組になるのではないかとの見方もあったが、実際には個々のトピックスについて各党の政策の大まかな概要をわかりやすい言葉で要領よく説明。討論の部分では各党首のパーソナリティーも垣間見え、意外におもしろい番組(reasonably informative and entertaining TV programme)になったとの見方が多い。

今夜のテーマは内政。会場視聴者は政党支持率を反映して選ばれ、事前に質問を準備(党首には知らされない)。途中の拍手ややじは禁止されており、極めてお行儀の良い観客。取り上げられたトピックスは、移民、犯罪、教育、議員の経費スキャンダル、政治改革、財政再建策(増税と政府支出削減)、アフガン、医療(NHS)、高齢者、と広くカバー。個々について深く討論するような場ではなかった。

労働党と保守党はお互いを攻撃しつつ自民党に秋波を送り「私はニックと同意見だ("I agree with Nick.")」を連発。「ハング・パラメント」を睨み、キャスティング・ボートを握る第3党の自民党との政策共通点を強調。一方の自民党は、「合わせて65年間英国政治を牛耳ってきた二大政党」を攻撃。真のチェンジ/オータナティブとしての自民党をアピール。

各党首ともしっかり練習をただけあって、大きな失点を喫した党首はなし。番組終了直後に4000人の視聴者に対して行われたアンケートによると、本日の勝者は43%獲得のニック・クレグ。事前の期待値が高かったキャメロンは26%とふるわず。逆に期待値の低かった分ブラウンは20%でもまあ上出来の部類。主要な政治評論家やメディアの政治記者の見方もほぼ同様。

16日の主要紙朝刊見出しの殆どが、ニック・クレグを第一回党首テレビ討論の勝者と報じている。

「アウトサイダー表舞台へ」(Enter the outsider)[タイムズ]

「重要なテレビ対決でクレグの星が上昇」(Clegg's star rises in great TV showdown) [デイリー・テレグラフ]

「クレグに熱烈な称賛: 党首対決で選挙に活気」(Clegg takes plaudits after first debate: Confrontation sparks election into life) [FT]

「クレグが二大政党制を打破」(Clegg smashes two-party system) [インディペンデント] (Independent)

ざっと見たところ、唯一デイリー・ミラー紙が「大人対子供の対決」(It's a man versus boys.) など、ブラウンのパフォーマンスを評価している。

井上 貴子(問合せ: tinoue@komatsuresearch.com)